NEWS DIGEST

保健・医療・福祉のこのひとつきの動き

原因不明麻痺 61 人
エンテロウイルス原因か

昨年夏以降，発熱などに伴う麻痺症状が子どもに相次いだ問題で，厚生労働省の研究班は 29 日，全国調査の結果，「エンテロウイルス D68」の流行時期に麻痺で入院した 61 人がウイルス感染との関連が疑われ，その約 8 割に麻痺の後遺症が残っていると発表した。検査できた患者のうち，4 分の 1 からはウイルスが検出された。

研究班によると，麻痺の患者は 33 都府県で 115 人の報告があった。調査に協力した 101 人のうちウイルスが流行していた昨年 8〜12 月に麻痺を起こした子どもは 95 人。このうち他の原因が考えられる患者を除いた 61 人は，過去のウイルス感染で報告のある「急性弛緩性脊髄炎」と診断された。うち 1 人は外国人で，国外で発症した可能性があるという。

髄液などの検体を調べた患者のうち，4 分の 1 からウイルスが検出された。麻痺を起こした多くは 5 歳以下で，8 割程度は手足の麻痺が残っているという。

エンテロウイルス D68 は，子どもを中心にせきや発熱，呼吸困難を引き起こす。せきやくしゃみなどの飛沫を通じて感染が広がる。治療薬やワクチンはない。今夏は流行は確認されていない。研究班代表の多屋馨子（国立感染症研究所感染症疫学センター室長）は「ウイルス感染と麻痺の関係は調査中だが，子どもに発熱などの症状があって手足が動かしづらいときは，速やかに小児科を受診してほしい」と話している。

（8 月 29 日付毎日新聞）

アルコール依存症
3 割超が相談先知らず

内閣府は 8 日，アルコール依存症に関する世論調査の結果を発表した。依存症が疑われる場合について，9 割近くが相談の必要性を感じていたが，3 割超は具体的な相談先を知らなかった。

調査は 7〜8 月，18 歳以上の 3000 人を対象とし，1816 人（60.5%）から回答を得た。政府が 5 月，飲酒による健康障害を予防する基本計画を閣議決定したことを受けて初めて調べた。厚生労働省の調査によると，全国で 109 万人が依存症と推定されている。

「依存症が疑われる場合に相談するか」との質問には，「する」が 88.1%，「しない」が 11.7%。「しない」理由の最多は「必要を感じない」が 28.8% だった。

具体的な相談先（複数回答）については，「医療機関」（54.9%）や「保健所などの公的機関」（21.9%）をあげる人が多く，「断酒会などの自助グループ」は 4.4% にとどまり，「具体的には知らない」が 33.7% だった。

依存症についての知識はばらつきがあり，「飲酒をコントロールできない精神疾患」と 68.5% が認識していたが，「女性のほうが短期間で発症する傾向がある」を知っていたのは 19.7%，「お酒に強い人ほどなりやすい」は 9.8% にとどまった。

相談先などの情報は内閣府ホームページ（http://www.cao.go.jp）で得られる。　（9 月 9 日付朝日新聞）

同時に子育てと介護
「身近な問題」45%

子育てと介護に同時に直面する「ダブルケア」について，40 歳以上の 45.4% が「身近な問題」と感じていることが厚生労働省の調査でわかった。政府は現時点で少なくとも 25 万人いると推計。晩産化や高齢化によって，ダブルケアを抱える人はさらに増えそうだ。

調査は今年 2 月，インターネットモニター会社に登録している 40 歳以上の男女 3000 人を対象に実施。結果は 10 月上旬に閣議決定される 2016 年版の「厚生労働白書」に盛り込む。

ダブルケアを「身近な問題だと思うか」との質問に対し，「思う」と答えた人は 15.1% で「どちらかというと思う」は 30.3%。一方，「どちらかというと思わない」と「思わない」は計 34.0% だった。自らがダブ

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2016

1348-8333/16/紙：¥500/電子：¥750/論文 /JCOPY
2026/09/15 13:00:37

ルケアを抱えるほか，子どもに負担させる不安も含まれるとみられる。

ダブルケアの担い手に必要な支援を2つまで選んでもらったところ，介護と育児を同時に相談できる行政窓口を求める人が最多の43.3%。「介護も育児も合わせて支援サービスが提供される場所を地域でつくる」が33.6%で続いた。

内閣府の推計では，ダブルケアをしている人は30～40代が8割を占める。ダブルケアになってから仕事量を減らしたり離職したりした人も多く，負担軽減が急務となっている。

（9月10日付朝日新聞）

隠れメタボ
筋肉に血糖を取り込む力が低かった

太っていないのに血圧や血糖などに異常がある「隠れメタボ」の人は，血液中の糖を筋肉に取り込む力が落ちているとする研究結果を，順天堂大などのチームがまとめた。

日本人は欧米人と比べ，太っていなくても生活習慣病を発症しやすいとされる。太っていると血中の糖を体の細胞に取り込ませるインスリンというホルモンが効きにくくなるため，チームはこの現象が太っていない人でも起きていないかを調べた。

研究に参加したのは男性114人。さほど太っていない状態（体格指数＝BMI 23以上25未満）でも，高血圧，高血糖，脂質異常のどれか1つでもある人は，異常がない人と比べインスリンの作用で糖を取り込む筋肉の能力が20%ほど低かった。低さの度合いは，太っている「真性メタボ」の人たちとほぼ同等だった。

真性メタボの人は，やせることで生活習慣病を防ぎやすいが，隠れメタボでは効果の高い予防法は確立していない。インスリンの効きをよくするには有酸素運動や筋トレが効果的とされており，今回の結果は隠れメタボの対策につながる可能性があるという。

順天堂大准教授の田村好史氏は「まずは少しずつでもいいので，体を動かす習慣をつけることが大切」と話す。論文は米国の内分泌学会の機関誌に掲載された。

（9月16日付朝日新聞）

所得格差最大
高齢者と単身世帯増で

厚生労働省は15日，世帯ごとの所得格差などを示す2014年の「所得再分配調査」の結果を発表した。所得格差を表す「ジニ係数」は，税金などを支払う前の所得（公的年金などの給付を除く）にあたる「当初所得」で0.5704（前回比0.0168ポイント増）となり，過去最大を更新した。

当初所得のジニ係数は1984年から年々増加している。2014年の当初所得の平均は392.6万円で，高齢者が家計を支える世帯では95.3万円だった。所得格差が広がったことについて，厚生労働省は「高齢者と単身世帯の増加が要因」としている。

（9月16日付読売新聞）

虐待死71人
「実母が加害者」目立つ

2014年度に虐待を受けて死亡した18歳未満の子どもの数は71人（前年度比2人増）だったことが16日，厚生労働省の発表でわかった。無理心中を除いた44人のうち，0歳児が61%を占め，「望まない妊娠」で実母が加害者となった事例が目立った。さらに，統計を取り始めた2003年度以降で初めて「心理的な虐待」による死亡が認定された。

心中以外の虐待死を年齢別でみると，0歳児が最も多い27人で，このうち15人は出産直後に遺棄されて死亡していた。0歳児の全体に占める割合は，2013年度までの5年間，4割台だったが上昇した。このほか，3歳児7人，1歳児4人などとなっている。

加害者別では，実母が最多の28人（63%）で，実父が3人（6%）など。実母の半数以上は「望まない妊娠だった」といい，医療機関などで妊婦健診を受けていないケースも目立った。（9月17日付読売新聞）

65歳以上，総人口の27.3%
女性は初めて3割超え

9月15日現在で，65歳以上の高齢者人口が推計で3461万人となり，総人口に占める割合が27.3%にのぼった。前年から73万人，0.6ポイント増え，いずれも過去最高を記録した。女性の65歳以上の割合は初めて3割を超えた。総務省が19日の「敬老の日」に合わせて発表した。2015年国勢調査の速報値をもとに推計した。

65歳以上の男性は1499万人（男性人口の24.3%），女性は1962万人（女性人口の30.1%）。年齢別では，70歳以上が2437万人（総人口の19.2%），75歳以上が1697万人（同13.4%），80歳以上が1045万人（同8.2%）だった。

国立社会保障・人口問題研究所のこれまでの推計では，65歳以上の高齢者が総人口の3割を超えるのは8年後の2024年とされている。少子高齢化が進む中で働く高齢者も増えており，同省の労働力調査によると，昨年は過去最高の730万人。このうち65～69歳の就業率は，男性が52.2%，女性が31.6%だった。

（9月18日付朝日新聞）

2026/09/15 13:00:37